客船よもやまばなし

＜連載⑩＞

博物館になった英客船オリアナ

大阪府立大学船舶工学科講師
池　田　良　穂

イギリスの老舗船会社P＆Oの大型客船オリアナ（41,920総トン，1960年建造）が，日本の企業に売船され，今年8月1日から湯の町別府で海洋博物館としてオープンした。

この船は，1960年にイギリスのビッカース・アームストロングス造船所でオリエント・ライン向けの客船として完成した。用途は，英国とオーストラリアを結ぶ定期航路用で，いわゆる移民客船色彩の濃い船であった。このため，船内の等級による差は著しく，1等に乗れば天国，2等は地獄（これはすこし言いすぎだが）。両等級間は重い鉄の扉で遮ぎられ，2等客が1等客のスペースをかいまみることもできない作りになっていた。この点は，同船が定期航路を引退して，クルーズ客船に転用された時に，きわめて使いにくい船としてしまった。客船の専門家であった故速水氏がかつてオリアナを酷評していたのを聞いた事があるが，理由は主にこの点であったように記憶している。

しかし，オリアナの1等の公室が筆者は好きであった。これは，たぶんに同船が筆者の見た最初の大型豪華客船であったせいなのかもしれない。まだ学生時代に神戸の代理店に日参し，やっと手に入れたボーディング・パスを持って，神戸港に停泊するオリアナに乗船したのが，筆者の生まれて初めての大型の客船との出会いであった。最初に，1等の公室を見てまわったが，その落ち着いた豪華な内装が今でも目に焼きついている。その後，幾度か同船の船内を見る機会に恵まれたが，ついに実際に乗船して船旅を楽しむ機会がないままに同船は最終航海を迎えた。昨年の春のことである。この時も船内に入ることができた。しかし，最初に彼女に出会ってから10数年を経過し，公室全体がすっかりすすけてしまって，痛々しい感じであった。引退が決まってからは，メインテナンスにもあまりお金をかけなくなったのであろう。椅子などもかなり擦り切れていた。

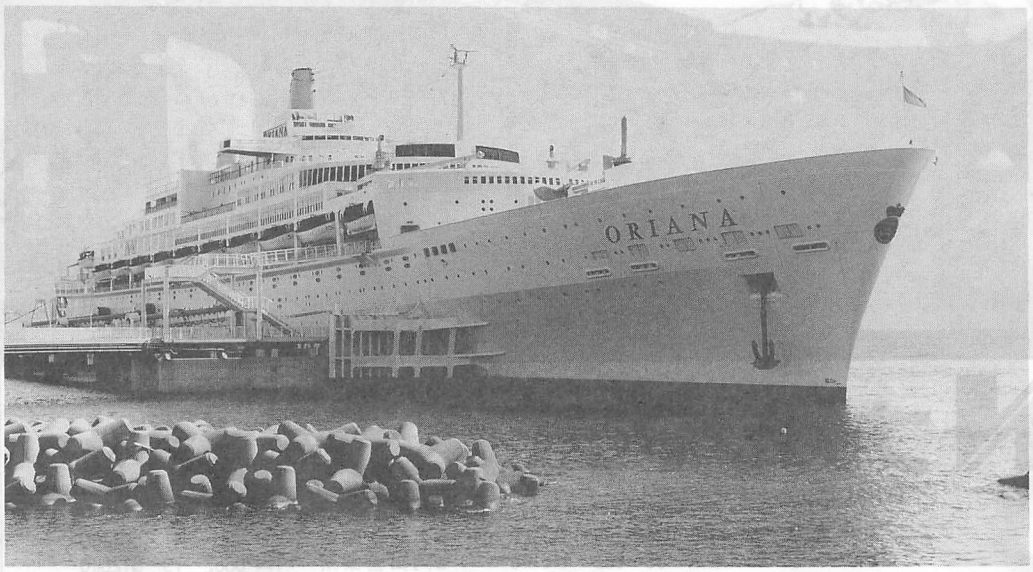
こうして同船の最終来日を見送って，数カ月たって日本の企業が同船の購入に動いているとのうわさを耳にした。最初は，信じられなかったが，次第にそのうわさが信憑性のあるものと分かって来た。オーストラリアの船友だちからも，それを裏付ける情報も入り出してしばらくして，このオリアナがひょっこりと筆者の目の前に姿を現わした。

昨年6月24日のことである。筆者の住むマンションから日立造船大阪工場のクレーンの頭が見える。ある朝，その横に見たことのあるクリーム色

のファンネルが見えた。タンカーのファンネルにしてはずいぶんスマートな形だと，いろいろ思いを巡らせているうちに，はっと気がついた。これこそ，幾度も神戸の港で見たオリアナのファンネルだと。結局，大和ハウスが同船を購入して，堺にある日立造船の大阪工場で海上博物館に改造工事が行なわれることがわかった。以来数か月筆者の家の窓から改造中のオリアナのファンネルが見えた。最初は，なかなか改造工事にとりかからず，地元の旅館組合との交渉，係船水域での漁業権の問題，消防法との問題等で，計画がなかなか進まないとの噂を聞いた。一時は，別府での計画が実現しないのでは，という危惧を持ったが，やがて改造工事が開始され，その危惧もふっとんだ。日に日に改造工事が進み，今年5月には改造も終わり，オリアナは別府へと引かれていった。

8月にオープンした同船を訪れる機会はなかなか得られなかったが，10月になってようやく，長崎への出張の途中，同船を訪れることができた。大阪から乗船した別府航路の大型フェリー「さんふらわあ2」が別府観光港に近づくと，観光港のすぐ南に係留されているオリアナが朝日にまぶしく光っているのが目に入った。移民船，クルーズ客船として活躍した同船にとっては，3度目の奉公であった。入場料2,500円を払って船内に入ると，船内は昔のおもかげがほとんどないほど，徹底的な手が加えられ，一瞬大型客船の中にいるとは思えないほどであった。海事博物館としての展示もかなりよく考えられており，それなりにおもしろいものであった。ロングビーチでほぼ同じように海事博物館として余生を過ごすかつての大西洋横断豪華客船クイーン・メリーと同様にエンジンルームも見学コースとして整備され，まさに今では骨董品的な機械類が並んでおり，舶用機関の歴史的な立場からも極めて興味深い。船上には，いくつかのレストランやカフェもあり，それぞれがモダーンで，サービスもよかった。従業員には外国人も多数おり，教育もよくいきとどき感じがよかった。しかし，筆者にはなにかものたりなさが残った。それは，古いオリアナのイメージへのノスタルジアなのかもしれない。

ともあれ，第3の人生に歩み始めたオリアナに幸あれと，祈って筆を擱きたい。



別府港で海事博物館としてオープンした英客船「オリアナ」

ねえ、写ってるわよ！……（レストランで）

それはとも角，我々も負けてはおられません。早速ワインを注文し，フルコースを頼みました。オードブル，ブイヤベース，神戸牛，どれもたっぷりの量で，たっぷりと時間をかけて頂きました。クラス会や食事会をするのなら，こういった移りゆく景色を見ながら，ゆっくり食事を楽しむのもいいだろう。何といっても客の入れ替えがないので気兼せずに，船が入港するまでお喋べりもできる。広々とした窓からは，本当なら神戸の西海岸や淡路島も見ることができるだろうし，ムードやロマンを満喫しようと思えばナイトクルーズを選べばいいのだし……。ま，今日はこのメンバー，景色は灰色で何んにも見えなくとも，充分にストレスを解消してくれる。「ねえ，このワイン国産だけど，仲々いけるわよ」「このオードブルもいい味しているね」「お肉も軟らかいし」「でもこのパン，学校の給食のパンみたいだわよ。ちょっとパサパサしてない？　神戸のパンは美味しいんだから○○や△△のパンにすればいいのにねえ」……ずい分と好きなことを言ってくれますね——。

＊　＊　＊

年末年始，忘年会や新年会といろいろな催し物が予定されている。きっと好評を得ることだろう。残念乍ら，まだあまり多くの人に知られてないようなので，市内観光と組合せるなど団体客を勧誘し，たくさんの人に知ってもらいたい。人々の船への関心が高まり彼方此方（あちこち）でこういった，より素晴しいクルーズ船が誕生することを期待している。本船は1月18日から3月11日までドック入りして，お色直しするそうだが，最後にもう一言，「レストランの床に絨毯を敷きつめたら，もっと豪華になるわね」とは，仲間の感想でした。